

ハイスクールD×D～道
を貫きし者～

シャニムニ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兵藤一誠の幼なじみの本道進のハイスクールバトルアクション!!!二次ファンから移転してきました。どうぞよろしくツ!!!

目次

俺とあいつの日常編	1
俺とあいつの日常編〜キンチョー〇と起	
床	10
俺とあいつの日常編〜ペーコンとレタス	
〜	19

俺とあいつの日常編

「俺、彼女ができたんだッ!!」

そんな天地が前周りにして後ろ周りにしてハンドスプリングしてトリプルアクセルしてもあり得ないような話を聞かされることになった春。いきなりそんな夢物語をいいだした少年、イツセーこと兵藤一誠。

これがもし普通の男子ならサバトの生け贄ぐらいすませてたが、こいつの場合は違う。

なんてつたつてエロい。まあ、エロい奴はこの年ならだいたいそうだろう。みんなエロ本の一冊や二冊くらいは常備してるだろう。けど、こいつはここで終わらない。学校・・・いや、近隣の学校に通ってる奴なら大体が知っているほどのコイツはエロい。むしろエロさしかない。エロの為に生きてる様なもんだ。ほんと・・・将来、一体何になるんだ？頼むから犯罪にだけは手を染めないでくれよ……。

それが、俺、本道 ほんどう 進 すすむ がみてきた。兵藤一誠という存在の簡単な理解だ。

そんな奴であつたせいとか、俺ははじめこいつのいつていことがまったく理解でき

なかった。いやいや、真剣に頭に変な菌がわいちまったんじゃないかと 思ったよ。
「うるつせえーぞ、イツセー! ギャルゲ出来ねえじ やねえかッ!! 大体、んな地球が四回
転半しようとし て失敗して今から地球が太陽に突っ込むみたいな嘘 いわなくてい
いんだよッ!!」

「事実だよ!! てか、俺が女の子と付き合うのは世界 滅亡並の嘘と同列なくらい信じら
れないことなのッ !? あと地球どんだけ俊敏なんだよッ!」

「つせえーな、うるつせえーなッ!! こちとら今から ギャルゲして二次元の嫁たちに会
いにいこうとして るのを、お前に止められて殺意がわいてんだよッ!! しかも、理由
が彼女ができたからあ!?! んな有り得な い事言つてないでささつと帰つてシコつてね
ろッ!!」

まったく、イライラする。俺ははやく嫁たちに会い たいんだ。

「いやだからホントだつてッ!! ほらッ!! 携帯見ろつて ッ!! 女の子の名前書いたるじゃ
んかッ!!」

そう言つて顔の前携帯電話の液晶画面を無理やりを 近づけてきた。

「ほら、見ろつて。ちゃんと女の子の名前があるだ ろ?」

そういつて見せてきたディスプレイにはくつきりと (天野夕麻) とかいてあつた。

「てんの… ゆうま? え? 男?」

読めん…。いやまじで…目が悪いとかじゃなく頭が 悪い方向で読めない。

「あ・ま・の・ゆ・う・まッ!!ホント頭弱いな……」

そう言つて俺に残念そうな視線を向けてるくるイツ セー。

「悪かつたなッ!!実際頭が悪くなつた原因は親父の せいだッ!!」

ホント、あれはないわ…。なんでガキの頃からあんなに殴られなくちゃならん。

拳法の練習とか、修行とかいうレベルの話じゃね えだろあれ…。

「まあ…アレはヒドかつたけど…。俺の親が何度育 児機関に連絡したか…。つてそん

なことほつというて 彼女だよ、彼女。」

ほつとくな。こちらら命がけだつたんだぞ、こら。 雨も嵐も雷も関係なく毎日死ん

でた。文字通り心停 止してた。そのたびに一撃胸に食らつて心臓を動か させられ

てた…。もう行き過ぎてさー。三途の川に 知り合いができちまうぐらい。まあ、それ

は置いと いてだ。

「イツセー……、ついに空想彼女を創るようになって てしまったか……。待つてろ、今

すぐ腕のいい精 神科に…」

「違うつつのツ…事実だつてのツ!!どうしたらわ かつてくれるのさッ!?少しは親友

の言葉を信用して ほしいんですけど!?!」

「ハッハッハッ…。一ミリも信用してねえよ」

「いやいや、信じろよ。なんで十年來の友の話を信じてくんねえーんだよッ!!」

「逆に聞くが普段から色欲全開でクラスどころか学校校通り越して地域の皆様方が知るぐらゐの変態歴が十年以上あるこのあたりの女子からゴキブリの大群が寄せ集まったものを見るような視線を常日頃向けられる奴がいきなり彼女できたっていわれて、おま え信じるか?」

「無理……です……」

「だろ?それが今俺が抱いてる気持ち。今すぐにでも墓にぶち込んでやりたいの我慢して青酸カリ飲ましてあの世に送るので手をうってやろうと考えてる俺の慈悲に感謝して自殺しろよ」

「ああ、ありが……。つてどれもエンディングにむかっているんですけど!?感謝を要求でき要素一ミリも見えないんですけど?」

「チツ…バレたか……」

「俺、時々。お前との付き合い方を真剣に考えるべきだとおもうんだけど……」
んな事知ったこつちやねーつての。

とまあ、そんなやりとりがあつてしばらくたつたが、いまだに話し合いに決着がつかないでいた。

「ああまあ、世界滅亡がほんとに今すぐ起きると言うのも信じてしまうと仮定において、おまえに彼 女が出来たとしよう」

「ああ、…ん、もぐつ…んく。そうしてくれ。しかし、このほうれん草のお浸し旨いな」

「はぐつ…もぐもぐ…。そうかあ？」

とりあえず、イツセーが晩飯まだだというのでは晩 飯食いながら話を続ける事にした。

「まあ、それよりもだ。んでなんで俺の所に報告な んぎにきた。ただ自慢したかったってだけなら明日 学校の屋上からお前全裸にして パイルドライバーかますからな」

「うぐつ…」

俺の言葉に喉に食べ物を詰まらせるイツセー。みる と心なしか顔色が悪い。

「なんだ凶星か？ だったらコロサナキヤナランノダ ガー？」

なんだってリア充の誕生を祝福しなきゃならんのか なあー？ かな？

「いや、その。待ってくれ。確かに一割はそうだけ ど…」

「よし、すなおに話したのでパイルドライバーはや めて床に画鋏敷き詰めてそこに顔面からバックドロップするので手を打とう」

「すげー…譲歩してるように見えて一ミリも譲歩してない。その上、顔面をズタボロにするだけで生殺しにもほどがある…。鬼だ、鬼がいる…」

「んで、残りの九割は？」

俺が今日のメインである魚に箸を入れながらイツセーにきく。

「あ、ああ…実は…」

「…つてわけで、手伝ってくんね？」

「……………」

イツセーの頼みを要約するところだ。《いきなり彼女出来ただけどうしたらいいかまったくわかりません。デートもしたことないからどうしたらいいか一緒にかんがえてよ》つてことだそうだ。

「とりあえず、何はともあれぶつ殺していいか？」

「待つんだ!!確かに俺もおまえの立場なら迷わずそう言っていたが落ち着いてくれッ

!!!

ハッハッハッ…。そんなムチャな。

「俺の右腕が手めえを殺せとひしめき合う…」

「おちつけ、今度ギャルゲ一本奢るから」

「任せろ、イツセーッ!! デートにかんしちや俺の右腕にでるものは五万というッ!!」
「スタイリツシユ手の平替えしッ!？」

「さあ、始めようじやないかッ!! カマンカマンッ!!」

「どんどこいやあー!!! デートときいちゃあ、ギャルゲで培った経験が生かせるぜッ!!!」
「じゃ、じゃあ。進ッ!!! まず何からすれば!!!」

「知らん」

「さらなるスタイリツシユ手の平替えし!?! う、うら ぎりが速すぎる」
「狼狽するイツセーに手で静止させる。」

「まあ、さて。イツセー。落ち着け。策ならある」

「な、なにいいー? い、いったいどんな」

「かなり驚いた顔をして近づくとイツセー。俺は更それを手で制止させてから言葉が続ける。」

俺は立ち上がり両手を大きく広げながらイツセーに 問いかけた。

「イツセーよ。おお、イツセーよ。我が十年來の下僕でありぼろ雑巾よ。俺の趣味を述べてみよ」

「え? 色々とツツコミ所はあるけどまあ、話を進めたいんでむしろ。ギャルゲだよな?」

「そうだッ!!! 私の趣味はギャルゲッ!!! それも若干十 を数える頃から続けている。いわば私の魂の癒しにも似たものだ。そしてイツセーよ。思い出すのだ。ギャルゲの正式名称を!!!」

「ギャルゲって…確か…。ま、まさか!？」

「そのまさかだよ、イツセー。ギャルゲの正式名称 は《恋愛シミュレーションゲーム》つまり恋愛を想定したゲームなのだよ」

「なるほど、恋愛想定したゲームならデートに関する事の一つや二つはあるだろう、つまりそれを参考 にして…ッ!!!」

イツセーも立ち上がり目をきらきらと輝かしながら 見てくる。俺も同じくらいテンションがあがりなが らそれに答える。

「ああ、さつきいつてたデートプランを決めちまお うッ!!!」

「あ、ありがとう進ッ!!! お前は天才だよッ!!!」

「誉めるなよ、ただ少し諸事情があつてな」

「な、何だ? どうしたんだ?」

「最近俺のパソコンのギャルゲのデータを整理して てな。今いつこしか入ってないんだ」

まあ、一豆に整理しとかなないとすぐいっぱいになって処理落ちとかなるからね。

「へえー、どんなゲーム？」

「いや、それがあんまり覚えてなくてだな。安売りの時にまとめて買ったものでよ。とりあえず、入れるだけ入れといて放置してたのを整理したときに見つけたんだ、だからついだしそれを参考にし ようかと」

「あー、まーなんでもいんじゃないかね？俺もギャルゲし たけどなんか数えるほどしかしてないしさ」

「それもそうだな。まあ、パッケージの後ろのCGにはデートみたいなの合ったし大ジョブだろ。うん。」

「んじゃ、デートの参考するために《怒りの日》ってゲームをするか!!!」

「おーっ!!!」

《あなたは既知感というものを「ご存じ」》

なく遅刻できる。だが、俺ほどの遅刻魔になるとこの程度で満足してちやだめだ。最低でも三時間目くらいから学校に行き、四時間目から授業を受けよう。そのためには睡眠が必要だな、うん。では、寝るか。いやあ、春先だがまだ朝は寒いなあ、寒いのは嫌いだから布団から出たくないぜ……………。

いつとくがちやんと学校にはいくぞ？たぶん。もう一眠りしたらいくぞ？ホントだぞ？さつきもいったが、寒いのは嫌いなんだ。苦手なんだ。ついでに朝は嫌いなんだ、太陽がケンカ売ってきてるようになるように感じるんだ。だからもう少し暖かくなつて太陽が沈んだら活動するようになるよ、うん。じゃ、おやすみ……………。

「……………つてなんでまた寝ようとしてんだよツ!!いい加減起きろよツ!!遅刻するじゃないかツ!!」

いぎ、眠りにつこうとした直後いつものアホの声でおこされる。つたく、野郎、今の声で眠気を逃しちまった。

「……………つたく、朝から大声出してんじゃねえぞイツセー。近所迷惑だろ、それ以上騒いだら尻に爆竹積めるぞ」

「俺の肛門をお釈迦様にしないでもらえますかツ!?!てか、時間ヤバいじゃんかツ!!なんでこの目覚ましー時設定なんだよ!?!」

朝っぱらからうるさいやつだな、コイツ。つーか、なんで私服でうちにいるんだ?そ

れに、いま起きたみたい顔してやがる。

「おい、イツセー。なんでここにいる？学校はどうした？さぼりか？まったくだらしない奴め」

「おまえにだけは言われたくないよツ!!昨日、ここで2人でデートの参考にするためギヤルゲやってたじゃんカツ!!忘れたのかよツ!?しかも、参考にしたゲームがデートの描写なんて極少なうえに面白かったから二人で夢中になってやってたのを忘れたのかよ!!」

あーうつせーなこんちくしょうが…。こちとらあさは虫の居所がわりいんだよ…。
「うるつせーつってんだろうが、イツセー。お前がデートする話なんざ覚えてるかっ
んだよ。」

「ふざけんな、おい。おまえ昨日の晩にあつたやり取りを今すぐ思い出せつてのー!」

昨日の晩だあー…?うーんと…なんかそれっぽいことを話していたような…、ああ、
確か。

「お前がキ〇チョールと付き合いだしたからデート考える話しか!!」

「スプレー管とどうやってデートすんだよツ!!アレか!?スプレー管をもって出掛けて時々頬を赤らめながらスプレー管をみるのかツ!?どんな状況じゃそりゃあ!?スプレー管と付き合う人間とかこの世にいるかあーツ!!」

「るっせえーな…鼻にキンチョー○ぶっさすぞツ!?」

「逆ギレ!? え? 悪いの俺の方なの!？」

「俺、キン○ヨールの事を愛する奴はちよつと………てか、かなり嫌だ」

「俺も殺虫剤のスプレー管と付き合うなんてごめんだつてのツ!!」

「そ、そんな! 私の事は遊びだったの!？」 (進裏声)

「え? な、何!? 誰? まじ誰ツ!?」

「ヒドい、ヒドいわ、イツセーさん!!」 (進裏声)

「ま、まさかツ!? キンチョ○ルツ!? キンチョー○かいツ!?」

「あなたの事をずつと好きでいたのに………そんな、そんなツ!!」

「ま、待つてくれツ!! キ○チョールツ!! どこだ………どこにいるんだツ!?」

「サヨナラ………イツセーさん………」

「うわあああああああ………!!!! ○ンチョールウウウウウ………!!!!」

「………俺は、俺はツ!! 君 (キンチョー○) なしじゃツ!! 生きていけない!!」

「だああああ………!! なぜ、なぜなんだツ!? あれほど一緒にいて、同じ時間に生き

て。あれほど、肌を重ね合ったのに………。あれほどツ!!! 君が与えてくれる力に涙し頼

りにしていたのに……、どうしてだ、どうしてなんだ!! キン

チョー………

ルツ!!!

.....
てんな訳あるかッ!!なんでキンチョールにこんなに胸踊らせなきや行けないんだよッ!!
!!おかしいだろッ!!キンチョー〇に恋する人間なんていてたまるかあッ!!!

「ま、そういうアホなコントしてる間に八時半だ」

「遅刻しちゃまったじゃねえかあああー!」
!!!

「とりあえず、俺は家に帰って着替えたりしてくるからその間に出来ることをちやんとしとけよ?」

あんまりにもいじりすぎたせいでがちぎれしてしまっていたイツセーが元に戻ったのは一時間目が半分終わった頃だった。ようやく落ち着いたらかと思っただらいきなり帰らだそうとしやがる。まったく、マナーがなってないよ、ホント。

「まあ、待てよイツ.....」「またないッ!!」.....
バタンツ!!

そう言って勢いよくドアを閉めて出て行きやがった。全く、人の話は最後まで聞かなくてお母様に習わなかったのかよ...。まあ、なにわともあれ。さっきのやりとりで眠気も吹っ飛びしまったからどうしようかな。やることはあるが、それやるとまたとやかく言われそうだな。

「はあ……まあ、仕方ないなあ……。偶には素直に従つとくか」
そんな事をぼやきながら、制服のハンガーに手をのばすことにした。

その後、一時間ぐらいたったあと俺の住んでるマンションの前でイツセーを待ち、2人して登校するようになった。普段ならまだ、二時間目の中頃になんか登校はしないが、今日は1人うるさいのがいるため、しかたなく、しかたなく!!一緒に登校している。と、となりのイツセーが妙にキョロキョロと周りを見ている。なんか探してんのか? 「イツセー、どうした? そんなに呼吸していると首ねじ切るぞ?」

「ああ、ごめ……。つて呼吸すら許されませんですかねッ!」

「当たり前だろ? この世には存在するだけで人に迷惑がかかる存在がいるんだから。俺個人的にゴキブリと蚊とハエとイツセーは絶滅すべきだと思ってる……。……」

「もつとも多くの人が嫌ってる存在に俺も含まれてるなんて……。……」

「んで、世界四大害虫についてはどうでもいいから。さつきから何探してんだ?」
「ん? ああ、いや当然ながら他に登校してる奴がいらないと……。……」

「そら、そだろ。こんな時間帯じゃあ、いたとしても精々オバチャンくらいだよ。てか、うちの学校の奴やら女子に会いたくないからこの時間帯で登校してるんだが……。……」

「そりゃあ、俺がほかの人間、特に女子と会いたくないからな。この時間帯ならまず会わ

ない」

「ん？じゃあ、会ってくれる俺は特別ってことじゃ…ツ!？」

「そりゃあ、お前は害虫に部類される存在だからな。痲癩で殺してしまっても人じゃないから罪にならない」

「しどい………」

イツセーが涙を流しながらそう呟く。まえから思ってたんだが、おまえの涙腺って自分の意志で弛めることができるのかよ。地味にすげー。

「まあ、それは置いといて、何でいつもひとり登校するんだよ」

イツセー、確かおまえ俺の家庭の事情知ってたと思うんだが…。まあ、いいか。

「単純に女という種族が怖いし強いからだよ」

もはや女って存在は俺にとつて恐怖でしかない。世間一般の野郎はよくあんな存在のケツを追いかけ回すな…。

「進つて、時々ヘタれるよな」

「やかましいわ」

「というか、世の中の女性すべてが怖い存在ではないだろ」

「アホか。世の中の女なんてみんなお母様みたいに恐ろしい存在なんだろう？」

「いやいや、全人類をお前の母さんみたいな存在ではないから」

「俺は、例え相手が幽霊や化け物や神や悪魔や墮天使だとしてもひとりでもひとりで向かっていけるが、親父とお母様だけはダメなんだよ……」

ホント、あれは恐ろしい存在だよ、あの二人……。親父とか一人いれば国一つ軽く相手にならないし、その親父を一瞬で土下座させるお母様はさらなる上位の存在なんだよ。

「女ほど、この世界で恐ろしいものはないだろ」

「いや、間違つてもみんながみんな彩音さんみたいじゃないから、というかそんなんだつたら俺今すぐ自殺するから」

まあ、お袋ほどの存在がこの世界のデフォだったら一瞬で各国の首相が女の人に変わるな。

「……つとイツセー。グダグダしてたらこんな時間だ。もう走つて二時間目は間に合わんな」

俺が時計を確認すると時刻は10時15分を指していた。もう走つても意味ねーな。

「はあー、もういいや。進、このままコンビニ言つて弁当買つてから行こうぜ?」

「お、イツセーの割にはいいこと思い付くな。よし、害虫から昆虫に昇格させてやろう」

「……ちなみに聞くけどその昆虫の種類は?」

「イナゴ的な何か」

「害虫とあんま大差ねえよツ!？」

そんな事を話ながら学校に登校していった。

「ちなみに、キンチョー〇ルは買うなよ？」

「かわねえよツ!!!」

俺とあいつの日常編くベーコンとレタスく

その後、途中のコンビニで昼飯をかって登校すると時刻は四時間目が始まる少しまえだった。靴を履き替え自身の在籍しているクラスに歩いていく。クラスには何事もななくつき、教室に入る。クラスメートとは一切話せず、自分の席についた。いやあ、窓際の席はいいなあ。ギヤルゲの主人公みたいだぜ。

「よう。珍しいな、こんな時間にお前が来るなんてな」

「そうだな、しかもイツセーと来るなんてさらに珍しいな」

そういつて、やたら笑顔の丸坊主とメガネをかけたキザなやつがきた。2人ともイツセーの友達……てか、同種になる。まあ、俺もなんだがな。ええつと、名前が……。

「H A G Eとメガネ。今日もウザイな。とりあえず人をやめてくれないか？人じやなきや殺しても罪にならん」

「相変わらず名前覚ええない奴だな……」

「いや、コイツの頭のスペックを考えると当……ゲボラツ!？」

とりあえず、メガネがウザイから殴った。俺だつて好きで頭が悪いんじゃないやねえよツ!! 親父に頭殴られまくったせいで脳細胞が飛びまくったただけだつっの。

「…?なんで元浜倒れてんの?」

と、そうこうしてたらイツセーも来やがった。……つたく、一角に男子四人も集まりやがって……うぜえつーの。あと、ハゲ。テメエ、じやつかんイカ臭いぞ。何を……いやわかった、聞かないでいよう。

「さあな。大方、自分という存在の無意味さと邪魔さに気づいたんだろ?」

「お前のせいだよツ!!」

なんか、キレてきやがった。つたく。コレだから本田は嫌いなんだ。あと、勝手に人のせいにしてんじやねえつての。

「まあ、落ち着けよ同士。それで本道、なんでイツセーときたんだ?いつもなら別々にくるのに。それにおまえならもう一時間くらいサボるのにさ?」

H A G E 鈴木が話しかけてきた。窓際だから太陽の光が反射してうぜえ。頭の光を俺に向けんな、頼むから止めてくれ。溶けて死ぬ。

しかし、どう答えたらいいのか……、なるべく面白いおかしく答えたいな。どちらかというと、イツセーをいじる方向で。

「いやな、昨日の夜にイツセーがいきなりうちのマンションに来てさ。やることをやって気づいたら朝になってた」

瞬間。世界が静寂に包まれた

そう、例えるなら極北の風がこの空間を埋め尽くしたんだ。誰もが止まってしまう世界。そんななかこの静寂につつまれた世界でイツセーがいち早く反応してくる。

「ちよつと待てッ!? なんか色々端折りすぎだろッ!! もつと色々説明しろよッ!! 例えは：こよう。なんかあるだろッ!」

イツセーがなんか必死だ。そらまあそうか。自分にベーコンにレタスなスキルつくかもしれないからな。いやあ、愉快愉快。俺? 俺はその方がいい。何でかって? その方が女と喋る機会が減るからな。

と、女たちのヒソヒソ話が耳に入ってきた。こようみえても俺は身体能力が異常でな。俺の家系自体がもともと異常な身体能力をして産まれてくるらしいんだが、そこからさらに修行で異常に改造していく。つか、させられた。おもに親父に。

中でも親父が言うには、俺と親父は歴代の本道家の中でも1、2を争うほど身体能力が異常らしい。ふざけんなッ!! 誰のせいでもこうなったと思っただよッ!! 謝れよッ!! 俺の幼い頃の時間返せよッ!! ほんと、これのせいでどれだけのトラウマを植え付けられたか…。

ちなみに、普段は抑えてはいるのだが、元々が高すぎるせいでそれでも同世代の奴からみたら異常だ。抑えに抑えても百メートルを10、ちよい台で出せるくらいの身体能力だ。

———つと。話がそれたな。つまりは俺の身体能力が異常だからこの教室ぐ
らしいの大きさなら少し本気になれば小声での会話も全部拾えちゃうんだわこれが。

「やっぱり、本道クンって……」

「うん。前々からそんな感じの言動はしてたけど」

「けど、相手はツ!? やっぱり兵藤!? 兵藤×本道クンなの!?!」

「イヤーツ!! そんなカップリングはいやよ!! やっぱり木場クン×本道クンが一番よツ!!
美男子と中堅ツ!! これがベストよツ!! ちなみに攻めは本道クンよ」

「え? 何言ってるの? 兵藤×本道クンでしょそこはツ!! 幼なじみだった2人の関係があ
ることをきっかけに一線を越えて………シュルリ」

「はあツ!? え? 何言ってるの? 一目見たときから木場クンに惚れてしまった本道クンが
攻めに攻めまくるのが良いんじゃないツ!! あなたのシチュは………ぶっちゃけないわ」

「…アアツ!?! おまえ、なにほざいちやってるの。そんなありふれたシチュでよく満足
できるわね。木場クン木場クンってそんなにイケメンシチュがみたいならゲイバーに
でも行きなさいよ。ありふれたあんたが満足できるシチュが転がりまくってるわよ?
良かったですわね」

「……………おまえ、死ぬか? 死にたいのか? そうか死にたいんだな?」

「アホなこと言ってる暇があるならあなたが先に死になさいよ。ホント、生きてる意味

ないわ。幽霊にでもなつてホモでも観察してろつての自称お姫様（笑）」

「ぶつ殺すぞクソアマアツ!!!」

「やつてみるや三下アツ!!」

なんだこのカオス!? ここには変態しかいないのかよ!! いや、頼むから一人二人はふつうな奴がいてほしい。俺も含めてこのクラス全員変態だなんてイヤだぞそんな事実。ていうかその女子二人ツ!!! なんて投擲用の剣を投げ合つてんだよ。可笑しいだろツ!!! て、おいこら、今の動き中国拳法の秘伝の動きだぞツ!!! 普通にやつたつてあそこまでの練度でだせるかよツ!!! なに、このクラス。あれがデフォなのか…。うちのクラスのデフォはアレなのかツ!!!

「……おい、イツセー。さっきの話は、本当か?」

「いやいや、かなり省かれた説明ですからねツ!!! むしろ要点がなに一つ伝わってませんからねツ!!! おい、進ツ! お前からなんかいえツ!」

クラスメートが拳法やら剣やら使つて戦つてるのはソウスルーでイツセーが俺に助けを求めてきた。ま、まあ。クラスの女子をほつといてだな、イツセーの方を見ると、頼むから真実を話してくれつて目しやがる。はあ……しゃーないなあ……。

「何だよ、イツセー……。俺とお前の熱い夜はどこに消えちまつたんだよ……。2人で色々して熱くなつて疲れたからいつのまにやら寝てたんじゃないか」

なんでイツセーをいじるのを抑制しなきゃならん。俺はイツセーをいじるのに関し
ては一切の妥協はしない。

「なんでそっち方面に突き落とすんですかコノヤロウウウウウー……!!!」

イツセーの絶叫と女共の黄色い歓声が聞こえる。あ、2人ともドン引きしてる。

「イ、イツセー。おまえ……」

「ま、まじかよ……」

おまえら驚いてるのはわかるが、俺もこのクラスの戦闘能力に驚いてるよ。なんなん
だよ、これ。さっきの女子今の発言でさらにヒートアップして戦ってたんだが…。

「ま、まてッ!!待ってくれッ!!確かに俺はコイツのウチに行つて泣いたり泊まつたりな
んかしたが、ベーコンでレタスな事なんてしてねえッ!!」

イツセーがほぼ半泣き状態で叫ぶ。てか、さすがに飽きてきたな。そろそろ四時間目
も始まるし、このへんでやめといてやるか。

「まあ、確かにコイツはウチに来たが、なんか相談事があったらしいから来たんだとき。
んで、その問題を解決するためにゲームしてたらそれが面白くてな。夜遅くまでやって
たら気付いたら朝だったってだけだ」

「え?ほ、ホントだよな?嘘じゃないよな?信じていいよな?」

メガネが恐る恐る聞いてきやがった。隣にいるH A G E……めんどいな。ハゲもど

うなんだ？って顔してやがる。

「マジだったの。さすが飽きてきたからな。いい加減にネタばらしだ」

そういうとクラスからは脱力感と失望感が三人からは安堵のため息が出てきた。

「いやあ、焦った。まさか我らが同士、イツセーがパソコンでレタスなのかと思ってしまったよ」

「そうそう。危うく驚きのあまりメガネが割れるとこだった。本当に意地の悪い冗談だなイツセーよ」

「いや、なんか俺が悪いみたいな感じになってるけど俺悪くないから。悪いのはす…」
「キーンチヨール」進様ではなく、すべて私悪いのですハイイイイイイイー…ツ!!」

すごい早さで土下座したぞ？コイツ……。そんな土下座しているイツセーにメガネが思い出したように聞きやがった。

「そうだ。それでその相談って一体何なんだよ？俺や松田には言えないようなことなのか？」

まあ、ある意味いえないわな。いったらのろい殺されそうな事だし。

「水くさいじゃないか同士。俺たちの中にエロは合っても遠慮はないだろ？」

ハゲ、誰がうまいこといえていった。あと、その中に俺は入っているのだろうか……。

土下座していたイツセーがその言葉で思い出したように顔をあげた。

「そっだッ!! 3人とも今日、放課後あいてるか? 見せたいものがあるんだ」

「なんだよ、イツセー。見せたいもの? 新しいAVでも買ったのか? よし、今日見にいこうじゃないか。なあ、元浜」

「ああ、そうしよう。まったく、イツセーも水くさい奴だな。そうと決まれば、学校においてあるビデオを持って行こうじゃないか。手伝ってくれ、松田!!」

そんな感じに浮かれてる2人をよそに、俺はイツセー聞いた。

「なあ、イツセーもしかして件の人にあわせるのか?」

「ああ、2人には悪いが、俺はもう別次元の世界にいることを証明しなくてはいけない。そう俺はッ!! 勝ち組だからなッ!! エロエロな事が出来るからなッ!!」

「ああ、そ。ノロケかよ……まあ俺も行くかな。てか、眠いから寝るな? 放課後になつたら起こしてくれ」

了解という言葉を待たずに俺は眠ることにした。

ところ変わって放課後時刻は四時半。地元でも大きめの公園に野郎4人はきていた。「なんだよイツセー。こんな所に連れてきて。パンチラもブラチラもないじゃないか」

といつてメガネをキザつぼくあげる山田。

「まあ、まてよ。そろそろ……あ、きたッ!!」

イツセーが向いていた方向にスレンダーで整った顔をした美少女が歩いてきた。

「おまたせ、イツセーくん♪なにか用かな?」

キレイな声をした女だ。うん、確かに。カワイい。するとイツセーが自慢げに言葉を紡ぐ。

「紹介するぜ、お前ら。天野夕麻ちゃん、俺の彼女だ」

そういった瞬間2人がさわぎたしていたが、俺にはまったく聞こえなかった。いや、聞いている余裕が一ミリもなかったからだ。例えるなら、のど元にナイフを突きつけられているような。後ろたたれて拳銃を頭に突きつけられているような恐怖にみまわれていたからだ。

一瞬で。ほんのちよつとの気まぐれでイツセーやハゲやメガネを殺すことのできるほどの存在。そんな存在が目の前にいる。なんだよ、コイツ。人間とか人間じゃないとかの話じゃない。殺される。ほんのちよつとの気まぐれでほかの三人はおろか、俺すらも簡単に殺れる。こいつはマズい。あれは、いけない。アレは、俺以上の異常な存在だ。コイツはこの世界にいちやいけない。

「——ツ痛」

